

42010

教科書文庫

4
810
41-1907
20000 64991

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

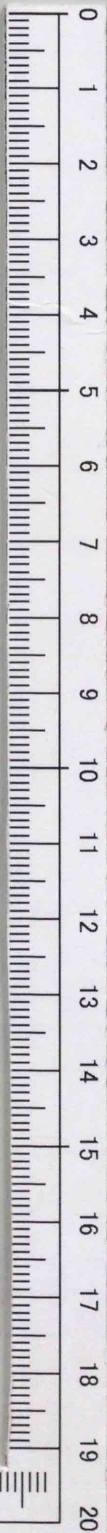
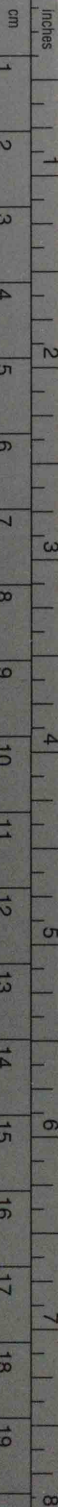


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Ko 11  
資料室

訂正  
中等國文讀本  
國學院編輯部編纂  
二の卷



資料室

明治四拾年貳月拾八日  
文部省檢定濟  
中學國語教科用書

375.9  
K011

國學院編輯部編纂編

訂正 中等國文讀本

東京

合資會社 吉川弘文館發行



訂正 中等國文讀本卷二

目次

第一	公益	一
第二	河村瑞軒その一	四
第三	河村瑞軒その二	十
第四	活版の由來	十四
第五	陶器	二十
第六	維新前洋學の狀況(書簡文體)	二十五
第七	勸學(新體詩)	三十二
第八	東宮殿下の御高德その一	三十三

中等國文讀本卷二目次

第九	東宮殿下の御高德その二	三十八
第十	機智(口語體)	四十二
	一、瑞典王と決闘	四十三
	二、盲人と盜人	四十五
第十一	新年餅九藏を憶ふ	四十七
第十二	雜木林	五十
第十三	水力の利用	五十三
第十四	樺太	五十六
第十五	威海衛の陷落その一	六十五
第十六	威海衛の陷落その二	六十九
第十七	威海衛の陷落その三	七十六

第十八	廣瀨中佐の最期	八十一
第十九	わが海軍(新體詩)	八十七
第二十	世界の週航	九十二
第二十一	萬里の長城	九十五
第二十二	伯林	百
第二十三	獨逸留學中の所感	百五
第二十四	我が郷國	百十一
第二十五	三保の松原	百十五
第二十六	喩言五則	百十九
第二十七	沈勇(口語體)	百二十一
第二十八	小僧三ヶ條	百二十五

第二十九 奇遇その一……………百二十九

第三十 奇遇その二……………百三十四

訂正 中等國文讀本卷二目次 終

訂正 中等國文讀本卷二

第一 公益

人は退きて身を修め業を成し、一點の疵瑕なきとき、實に國の良民たるに愧ぢずと雖、猶更に進んで公利を圖り世務を開くにあらざる以上は、未だ以て國家に對する義務を盡せりと謂ふべからず。家に居て獨を慎むは、固より修身の始なりと雖、一身の修徳は、廣く公衆に關する徳義の大なるに及

ばず。又進んで公衆の爲に有益なる事業をなすは、獨退きて智識を研くより迥に切要なるものにて、實に銳利なる思慮は、未だ敏捷なる行爲の價值多きに及ばず。概して之を言へば、畢竟如何なる智識も、如何なる學問も、社會に應用する所なければ、些の價值もなきものと謂はざるを得ず。但し高尚なる學術上の理論の如きは、直接に應用する所なきも、後來或は其の應用を發見する所あるべきを以て、之を貴重するものなり。

實に人生に於いて、最も高尚なる希望は、鴻業を成

重疊  
重疊  
重疊

し遂げ、以て社會進歩の一分子を加ふるにあり。此の如き人は、眞に不朽なりと謂ふを得べし。何となれば、其の痕迹は假令見るべからざるも、國の文化を増進する一分子となりて、永く後に存すべければなり。

然れども、徒に己の名を衒はんが爲に、事業を興すべからず。唯芳名の後世までも傳るほどの勳功を成すを以て主とするを要す。兩者の間毫釐の差の如しと雖、其の意志の迹に就きて之を見れば、大に相異なる所あり。名を賣るは己の爲にて、即ち自利

に過ぎざるのみ、事業の成ると成らざるとは、其の主とする所にあらざれば、名已に揚れば止むべきも、勳功を主とするものは、唯、公益を以て正鵠とし、已に正鵠に達すれば則ち止む。復名の顯るゝと然らざるとを問はざるなり。此の如くなれば、其の志望の極めて高尚なること、問はずして知るべきなり。(井上哲次郎)

第二 河村瑞軒その一

河村瑞軒、實名は義通、通稱十右衛門、後安治と改む。

江戸にて車力を業として人に雇はる。天性濶達ワカタクにて、才智人に勝れたれども、家計困窮して意の如くならず。

一日、奮激して、上方へ赴き、一身の運命を決せんと欲し、家財を賣却して金二三分を得、出でて小田原驛に至り、旅宿に投じぬ。偶隣室に一老人あり。談話の末、其の上方に赴く所以を問ふ。瑞軒由りて其の故を告ぐるに、老人笑ひて、子今日本一の江戸を捨てて、上方へ行きたりとて、何の益かあらん。且子の人相を見るに、大に家産を起すべき人なり。是より

一分ハキキ

直に江戸に歸りて奮勵すべしといふ。  
瑞軒げにもと感じ、歸り來りて、品川を通りけるに、折ふし孟蘭盆すぎの事とて、瓜茄子夥しく海岸に流れ寄れり。瑞軒之を見て、其の邊の乞食どもを雇ひて取りあげさせ、縁者方にて桶を借り入れ、鹽漬にして、普請場小屋にゆき、之を賣りしに、大勢の日傭ども、中食の菜にせんとて、争ひて買ひ取りけり。之を手始として、利發なるものなれば、普請方役人に取り入り、日傭頭となり、金若干を得、家宅を作り、多く人を召し使ひ、日に盛宴を催しければ、貯もも

はや少くなりしかど、瑞軒少しも意に介せず。  
偶府下大火ありて、延焼數里に及び、瑞軒の家宅も見る間に灰燼となれり。瑞軒、少しも驚かず、僅なる餘金を懐にし、夜をもて日につき、木曾にいたり、材木商の家をとふに、門内に其の家の兒と思しきもの戯れ居りしかば、懷より小判數枚を取出し、穴を穿ちてこよりに貫き、之を其の兒に與へ、入りて主人に逢ひ、手を盡して材木を求め、悉く價を定め、極印を押ししたり。續いて府下の材木商ども、同じく木曾に馳せ至れば、瑞軒既に價を定めて極印を押し、

他に餘材なし。せん方なく、何れも瑞軒に頼み、價を倍して之を買ひ取れり。是に於いて、瑞軒忽ち數千金を得て江戸にかへり、家居も廣くこしらへ、手代ども多く召し使ひ、夫より所々の普請を請負ひ、次第に富裕の身となれり。

或る時、芝増上寺の鈎鐘の龍頭のびて、撞くごとに動搖しければ、これを元の如く直させんとて、入札を命ぜられけるに、何れも足代組方に金子を費すこととて、高く見積りて入札せしに、瑞軒ばかり、他人の半分にも足らざる安札にて引請けたり。人々

皆この度は流石の瑞軒も、大に損をすべしとさ、やきけるに、瑞軒人夫二三十人ばかりを引き連れ來り、先づ増上寺近所の米屋どもに人を遣し、米を澤山調へたき故、價を定めて増上寺の鐘樓の前に持ち來るべしと觸れさせたり。米屋ども我もくと持ち來れるを、鐘の周に並べさせ、段々に積ませ、その上に鐘を受けて修繕を加へ、程よき時分に、龍頭をつらせ終へたり。さてかの米屋どもへは、再人を遣し、先刻調へたる米を壹升安にして拂ひたきに付き、取りに來るべしと云ひければ、また我も我



もと來りて、米を取りて歸れり。僅の價の損ばかりにて、手間も入らぬ足代をこしらへ、二時か三時の内に、元の如く釣りあげけりとぞ。

第三 河村瑞軒 その二

瑞軒學問を好み、多くの書籍を藏し、あまたの學生を養ひけるが、其の中には、新井白石の如き人もありき。天性よく地理を察し、其の計畫一として中らずといふことなし。これよりさき、江戸府の開くるや、西南諸道の漕運は、元和のころ既に通じたれど

も、奥羽二州の漕運いまだ開けず、公私共に其の不便を感じたりき。寛文十年將軍家綱瑞軒に命じて、奥羽の海運を開かしむ。

瑞軒先づ手代の才幹あるものを遣し、江戸より沿海を経て、港灣の位地を視察せしめ、略其の地勢漕運の便要を知り、而して後、商船の堅牢なるものを雇ひ、積荷の目方を定め、水手を精選し、其の給料を豊にし、陸奥の荒濱より西南に向ひ、房州にいたり、房州より折轉カクマカして江戸に至れり。其の間沿海百五十里中、奥州平潟、常州中湊、下總、銚子、房州古湊の

四ヶ所に漕務場を置き、臨時の救應に備へたり。又出羽の酒田より北海を経て、長門の下關に入り、瀬戸海を過ぎ、南海を航して、房相の間に入る八百餘里中、酒田、袖浦、佐州、小木、能州、福浦、但州、柴山、石州、湯津、長州、下關、攝州、大坂、紀州、大島、勢州、萬坐、志州、畔乘、豆州、下田、相州、走水、三崎の十四ヶ所に、漕務場を置き、下關に嚮導船を備へ、志摩鳥羽港の口、菅島の近傍、數十里の間、巨石波底に蟠りて、風雨暗黒の時、往々これにふれて破損せしかば、毎夜烽火を舉げて、暗礁を避けしめけり。これより海運大に開け、公

私漕運の便利を得、奥羽二州の米穀、遂に江戸に入るることとはなりぬ。幕府金三千兩を賜ひて、其の功を賞せられたり。

元祿元年、瑞軒又命を奉じて、大坂の水害を治む。是より先、大坂の諸川常に淤塞し、雨水溢れて民家を害したりき。瑞軒地理を按じ、あまたの翻車、木材、竹篋を作り、九條島の中間を鑿り、二道の新河を通じ、て海にながしぬ。長さ一千丈、廣さ三十餘丈。その泥土を河口に積み、山を築き、松をうゑ、通行船の目標とす。これを瑞軒山といひ、新河を安治川といふ。

日を費すこと僅に二旬。人その神速に驚けり。瑞軒の精勵思ふべし。元祿十年七月、將軍綱吉瑞軒を召し、多年の功勞を賞して、廩米百五十俵を賜へりといふ。(横井時冬)

#### 第四 活版の由來

人智の普及上進は、文字の力によること甚大なり。而して文字を顯す方法の簡易にして効果の最も大なるは、活版を用ゐて印刷するに若くはなし。されば、活版印刷の方法廣く行はるゝに至りてより、

世の文化は著しく進歩したり。

元來活版の發明は東洋を先とし、支那の鍛工畢昇といふもの、宋の仁宗の時、膠泥を燒きて始めて之を造りしが、一代にして其の方法を失へり。西洋にては、千四百五十年代に、獨逸人グウデンペルヒといふもの、木製の活字を發明し、續いて金屬を以て鑄造するに至れりといふ。

我が國にても、古くより植字板又は一字板など稱するものありしが、今世に傳ふるものにては、文祿五年印行の活版蒙求を以て、最も古しとす。其の後

徳川氏の頃も、屢活版を以て種々の書籍を印行せしが、是等に用ゐるしは、皆朝鮮の法を傳へて摸造せしものにて、木製の活字なり。されど加藤清正が、文祿二年に朝鮮より持ち還りし、眞鍮製活字の遺れるによりて考ふれば、朝鮮には木製の外、金屬製のものもありきと見ゆ。

現今我が國にて用うる活版は、本木昌造が西洋の製法を傳へたるを本とす。昌造は文政七年長崎に生る。家職を襲ぎて和蘭通詞たりしかば、蘭書を見、蘭人に聞きて、活字の製法を案出し、嘉永四五年の

頃、始めて流し込活字を造り、和蘭通辯の事を記したる、自著の一書を印行して、之を和蘭に送りしに、蘭人大に其の技術を稱賛しきといふ。昌造、萬延の初より維新に互りて、長崎製鐵所に仕へ、明治二年には、同志者と謀りて私塾を開き、讀書習字、漢學洋學の四科を授けしが、授業料、塾費など、一切之を徴せざりしかば、其の入費莫大にして支へ難きより、活字製造の業を始めたり。されど其の成績良好ならず。偶米國の宣教師某が、清國上海に美華書院を建て、自在に鉛字を鑄造する由を聞き、人を上海に

遣して視察せしめしに、美華書院にては、深く祕して之を教へざりしかば、其の者空しく歸朝せり。然るに、此の頃薩藩の儒者重野安繹、上海より活字を取り寄せて、印刷を試みしに、技術未熟にて用を爲さず、庫中に納め置けり。昌造傳へ聞きて、其の機械活字を購求して使用せしも、成績尙思はしからざりき。由りて米國宣教師フルベツキに就いて、種々疑を質し、且其の紹介によりて、上海美華書院の活版技師米國人ガンフルが、期満ちて歸國するに際し、之を招聘して長崎に滞在せしめ、製鐵所附屬

の活版傳習所を置き、就いて活字及電氣版の製法を研究せり。此の傳習生の一部は、昌造の設立したる活版製造所に入り、一部は製鐵所と共に工部省に屬せしが、明治五年東京に移され、勸工寮活版所の所屬となれり。此の活版所は、數度變改ありて、今の印刷局となれる者なり。

昌造は、此の後も活版印刷の業に従事し、熱心に其の改良を計りしが、明治八年病に罹りて歿せり。爾來活版の術日に月に進歩し、種々の出版に使用せられて、世の文化に資すること著大なるは、偏に昌

造創始の功に因る。明治三十年活版營業者相計りて、大阪天王寺畔に壯嚴なる銅像を建て、其の功を表彰せしは、誠に所以ありといふべし。(日本工業史に據る)

## 第五 陶器

陶器は、一般の日用品として、缺く可からざるものにして、生絲塗物などの如く、多く西洋にも輸出せられ、我が國第一等の産物なり。されば其の製造極めて盛にして、品類頗る夥多なりと雖、今其の上品なる者について、製造法の大略をいはん。

陶器を作るには、先づ粘土を細に碎き、水をもてよく黏し、大小種々の形に作りて、竈に入れて焼くなり。然れども、粘土のみをもてすれば、焼くとき縮みて、形を失ふ事あるが爲に、白砂の類を混ぜれども、粘土と白砂とにては、粘著せずして壞れ易きをもて、更に長石などいふ物をも混ぜず。この物熱にあへば、熔けて飴の如くなりて、粘土と砂とのつなぎとなればなり。この三種を混じて作りたるを、竈に入れて焼きたるを素焼といふ。茶碗徳利などの底に、粗糙なる處の見ゆるは、この素焼の處なり。

素焼は<sup>カク</sup>しかく粗糙なるをもて、汚點もつき、また水なども吸収し、物によりては入れがたきも有るが爲に、それを完全にするには、その上に上薬をかけて、更に焼くなり。上薬はまた釉薬ともいひて、大凡は素焼の物質と同一なれども、長石などの分量の多きをもて、焼く時溶けて流れかゝるが爲に、その處硝子などの如く滑になりて、光澤をも生ずるなり。

また陶器に種々の畫を焼き出すには、素焼の上に、色料をもて山水花鳥などの畫を描き、その上に釉

薬を塗りて焼くなり。色料中、常に最も多く用<sup>ふ</sup>うるは青色にして、次は赤色なり。青色はゴスといふ物にして、赤色は通例ベニガラを用<sup>ふ</sup>ふ。

上古の陶器は、その製極めて粗糙にして、今の瓦の如くなれば、陶器といはん<sup>も</sup>より、寧ろ土器といふをもて、至<sup>ち</sup>當とすべし。後には陶器と稱すべきも出て來れりといへども、釉薬を掛くるは、遙に後の事に、奈良の頃に始りたるなりといふ。然るに鎌倉の頃に至りて、加藤四郎左衛門景正といふ人あり。尾張の瀬戸といふ地に、陶器の業を起せり。この人は

1547

支那に往きて、その術を研究せるなりといふ。また足利將軍の時に至りては、陶器師祥瑞五郎大夫といふ人あり。支那より歸りて、肥前の唐津にて、その業を開きたるに、その後豊臣太閤の時、文祿の役に、肥前の鍋島氏、また朝鮮の良工を伴ひ歸りしかば、陶器の製造ますます精巧（上）を極め、今は却つて支那、朝鮮をも凌ぎて、世界第一等と稱せらるゝに至れりといふ。

日本陶器の産地にして、最も有名なるは、肥前の伊萬里、尾張の瀬戸、加賀の九谷にて、薩摩、京都も亦その中に數ふべし。殊に瀬戸は、景正が業を創めしより大凡七百年、我が國陶業の最も舊地なるが上に、その製品は、清白堅剛にして、且廉價なるをもて、一般の需用品となりて、遂に陶器を呼ぶに瀬戸物の名を用うるに至れり。また備前、美濃、會津および伊勢の萬古なども、有名の地なれども、前者に比ぶれば、その質いさゝか劣る所ありといふ。(物集高見)

## 第六 維新前洋學の狀況

(前略) 小生の洋學を始め候ふ頃は、既に洋學も大分



開け居り候ふ事故、其の前に比すれば、甚困難と申す程にはこれなく候へども、併し之を今日の状況に比すれば、學習の難易、實に天地の懸隔と申すも、過言にはこれあるまじくと存じ候。其の次第を左に少しく申し述べべく候。

當時は、英、獨、佛等の學は、猶未だこれ無く、唯蘭學のみこれあり。それとても先生として仰ぐべき人、未だ甚多からず。東京にて僅々七八の家塾これ有り、大阪、京都にては、一の師家これ有る位、それすら、多くは醫家にこれあり候ふ故、小生如き醫學生なら

ぬ者も、必ず醫家の門人とならざるを得ざる次第にこれあり、尤も醫書を學ぶにはこれ無く、専ら文法書、物理書、化學書を學ぶ事にはこれあり候へども、右等の學習を爲すには、必ず多數の醫學生と共に致さず候ふては、相ならざる事にこれあり、従つて、自然醫學生は主位を占め、他の學生は従位に居りし如き次第にこれあり候。

蘭學を爲すには、先づ始にガランマチカ並にセイ  
ンタキスと申す文法書を、素讀致し候ふ事にこれあり、其の前に、單語、會話讀本等を學習致すと申す

事はこれ無く、最初よりむつかしき書に取掛り候ふ事故、頗る困難を極め候ふ事にこれあり、但し右等の書物は、既に出版相成居り候ふ故、大に便利にこれ有り候へども、小生より四五年も早く始め候ふ人々は、皆寫本にて讀み候ふ事にこれあり候。小生の蘭學を始め候ふは、今より四十五年前にて、小生の十九歳の時にこれあり候。それ故、蘭書の文法書の始めて出版相成り候ふは、凡そ今より五十年足らず以前の事にこれあり候。其の頃に至りては、追々他の書も出版になり、又英學も開け、次いで佛

學も開け、又獨逸學も開け候ふ事にて、獨逸學は、市川兼恭君と小生とが首唱して、始めて開き候ふ事にこれ有り、是は今より凡そ三十五六年前の事にこれあり候。即ち小生が二十七八歳の時の事にこれあり候。

小生が蘭學を始め候ふ時分より、凡そ四五年間の頃に於いて、學習の困難なりし事を申し述べれば、右申す如く、版本は僅に文法書一二冊のみにて、其の他何書と雖、版本と申す物はこれ無き故、悉く寫本して讀む事にて、今日より考ふれば、實に無益の



弊害を免れ、大に幸福を得たる事にこれ有り候。猶  
當時の困難の状況に就いて、述ぶべき事も數多こ  
れ有り候へども、前申し述べ候ふ如く、猶多忙故、他  
日少しく閑を得候ふ上にて、申し述べ候ふ様致す  
べく候ふ間、右様御承知下されたく候。(加藤弘之)

第七 勸學

あだに過すなけふの日を

今日はふたゝびかへり來ず

むだに暮すなこのとしを

今年はまたもめぐり來ず

ただ時の間の日かげだに

惜みし人もあるものを

まなびの庭につどふ子よ

撓まず摘めよをしへ草 (高崎正風)

第八 東宮殿下の御高德 その一

わが東宮殿下の、かしこくも天皇陛下の聰明に似  
させたまひて、克己の御徳に富ませたまへること  
は、承りまつるごとに、いとど忝くこそ覺ゆれ。

殿下御年いまだ七つ八つと數へ奉るころ、御附武官として、某老大佐保育の大任を承れり。ある年の冬、霜いと深く、寒風身にしむ朝なりき。大佐は例によりて、曉ふかう參内したり。未だ夜も明けざれば、宮中にも煖爐の煙もたてず。ただ宿直の仕人、眠たげなる目に、小さき火鉢を打守りて、曉の寒さをかこち居るのみ。大佐のいと早く參内したるを見て、仕人はいそぎおのが火鉢をさし出して、この寒天の話などす。

程なく、殿下御起床後の諸準備も整ひしかば、大佐

は心や、落ち附き、かの火鉢を友に、時の到るを待ち居りしが、げさの寒さただ身を切るやうにて、如何ともしがたし。さては攻城野戦の時、寒氣の凜烈たるに逢ひて、あるは焚火し、あるは俗に云ふ跨火などせし習慣、思ひ出すともなく胸にうかび、その小火鉢を足もとに引きよせつゝ、御日記類を見つめぬたり。

やうく、曉近くならんとする程、ゴトンと音させて、扉をあけて入り来るものあり。大佐はかの仕人にやと後向きもせず、一心に御日記を読み居たり

しに、突然大佐といふ聲ひびきぬ。大佐は、その聲音の、幼く鋭く威嚴あるに、いかで身もをの、かざらん。直に突つ立ち、向き直り、殿下御機嫌麗しく入らせられますと言上しつゝ、最敬禮を行ひぬ。殿下は微笑を含みて軽くうなづかせられ、大佐寒いのと宣ひぬ。大佐は直にしか奉答すべきを、おのれ軍人として、保育の大事にあたりまつる身、かるがるしく答へ申すべきにあらずとおもひ、かの火鉢の事もわすれて、最もおごそかに、どういたしまして、軍人は寒い熱いなどといふ事は、決して口にする

ものではござりませぬと、憚る所なく申し上げたり。

殿下は暫しあたりを見たまひしが、何事も仰せられず、ただ左様かといと軽く宣ひて、やがて奥へ入らせたまひぬ。御後影の見ゆる限り目送し奉りて、元の席にかへりしが、さて見れば、かのわが跨火にせし小火鉢は、依然としてそこに存在せり。大佐はその慎獨の徳を缺きて、言行均しからざること奉答したるを、深く悔いてかしこみ居たり。

第九 東宮殿下の御高德 その二

紺天コンテン鶯絨の兵卒風の服装して、學習院教場の一隅に、多くの學生と共に、熱心に講義をきゝたまへるは、今朝大佐をおどろかしたまひし殿下なり。その御側に侍立ハシヤクして、常に輔弼ホシの任を負へるは、御附武官の中尉某なり。けふの寒さ殊に烈しければ、御身をきづかひまつりて、竊に御座の下に、かねてものせる火鉢をさし入れぬ。

殿下は何の御心もなく、書を読みふけりたまひしが、やうく御足元の暖なるに氣づかせたまひ、中尉をめして、凜乎レイフたる御けしきにて、中尉、軍人たるものは、寒いヒヤシの熱いアツクのと云ふことはないものだ。この火鉢はいらぬ。早く持ちゆけと宣へり。中尉は驚き畏み、常に變れる御氣色のただならぬに、何事も申し上げず、謹んで仰に隨ひ、その火鉢を取り除きたり。

さ左様はれ如何なる御感動にて、かく賢く貴き思召にならせたまへるか、と、中尉は専らその原因探究モトメサスに心を注ぎぬ。

雪  
けふは朝より降りつづく雪をやみなく、満都一尺

有餘の堆積を見るに至りぬ。

殿下は御課業了らせられて、雪中に還啓カエリあらせられぬ。中尉は御陪乘ヨロイ中も深く御詞の身にしみて、御前をさがりて後、直に事のよしをかのお大佐に告げ、その賢くおはする旨をくりかへし語りたり。大佐は暫しきゝゝゝるたりしが、思はず直立して、あゝ恐多い、恐多いと涙をこぼして打萎ヒクれぬ。中尉怪しみて、事の旨を問へば、さきモトにありし事を隈なく話し、不肖保育の大職を奉じながら、わが不徳のために、反つて殿下より躬行實踐ミナコトの御訓戒を賜ること、實

に身の措き處なし。この上は、ただ謹慎して將來を戒むるに在り。と、急ぎ殿下の御前に至り、再拜して今朝の過を謝し奉り、やがて退いて、其の筋に進退伺を差し出し、閉門謹慎罪を待つ。此の事いつとなく、九重の奥に達しければ、陛下には反つて大佐が朴直誠實ヌナリなる精神を愛したまひて、いよいよ殿下の保育の事を厚く任じたまふに至れりといふ。そもく、人生れて七八歳は、僅に父母の懷を離れたるに過ぎず。殿下はかしこくも、かの老大佐が言行の合一せざりしをば咎とがめ給はで、御身みづからそ



の探るべきを探らせ給ひて、實踐し給ひしこと、いかにかしこく貴き御心なりけん。克己ウツクミの御徳に富ませ給へることかくの如き、天下いづくにかあらん。我々國民は、世界無類の御國體の下に生れて、叡ウツクミ聖文武なる天皇陛下を戴き、又聰明銳敏なる東宮殿下を戴き奉ること、いかなる幸福ぞや。務めざるべけんや。勵まざるべけんや。(大町桂月)

## 第十 機智

### 一 瑞典王と決闘

むかし歐羅巴で、決闘が大流行で、何でも無い事に刀や銃を持ち出して、騒いだ時代があつた。諸國の帝王いづれも心配をして、之を禁ずる法度を出したが、なかく止みさうな様子が見えなかつた。只瑞典王ばかりは、一寸した機轉で決闘を止めさせたといふ話がある。

此の王、ある時決闘の禁制を出したが、其の後間もなく、二人の士官が何かの意趣で決闘をすることになつた。しかししもはや禁制も出たことだから、國王の免許を受けずばなるまいといふので、兩人揃

つて、王の前へ出て願つた。王は、宜しい。行れ。我も見分に往くぞ」と仰せられて、定めの日定め場所へ、一人の侍従武官を随へて臨まれた。いざ決闘が始るといふ際に、王は、兩人の中、一人の首が落ちるまで十分に闘へ」と言はれて、直に振り回つて侍従武官に對ひ、それから後に生き残つた一人の首は、其方が斬つてしまふのだ」との詞に、二人の士官はジロリと顔を見合せ、一致して願ひ下げにした。是から瑞典では決闘がパツタリ止んだ。(西洋笑府)

## 二 盲人と盗人

或る盲人が、庭の隅にコツソリ五千圓の金を埋めて置いたのを、隣家の男が知つて、夜の中に掘り出して持つて往つた。盲人が捜しにかゝると、無くなつて居るので、早くも隣の男が盗んだものと勘づいたが、さてどうして取り返してくれようと、色々考へた末に、やうやう一策を案じ出した。

一日盲人の方から、彼の男の處に出掛けて往つて、四方山の話の末に、自分が一萬圓持つて居て、其の中の五千圓は、危なげの無い處に藏して置いた事を、小聲で言つて、又殘の金も同じやうに埋めよう

と思つてゐる、趣をほのめかした。すると隣家の男は、それが何より善い。大金を藏ふのは、埋めて置くに限る」と、切りに勧めた。

盲人が歸つたあとで、隣家の男は、急いで其の庭へ忍び込んで、かの盗んだ金を元の場所に埋めたが、是はやがて一萬圓になつた所を、再び取つてやらうといふ料簡なのである。處が大當違ひ。盲人は二三日経つてから、先に金を埋めた場所を掘起しはしたが、後の五千圓を藏ふことはせず、今戻つてゐる前の五千圓を搔出しながら、折々は、盲人の方

が、眼の二つある人より、物を善く見るものだと言つた。(同上)

第十一 新年餅九藏を憶ふ

往年、余が舊同藩の中間に、九藏といふものありき。藩中綽名を付けて、餅九藏と云ひしこと、余が幼時に、之を父老より聞けり。九藏は一回に一舛餅を喫し盡して、郷里を距ること三十餘里なる、伊勢の神廟に參詣するに、往復の間に喫飯せざりきと云ふ。一舛の餅を一時に喫し盡すは、世間の廣き、人衆の

多き、或は其の人あらむ。余は敢へて餅を喫する點に於いて、感服するにあらず。他の點に於いて、大に感ずる所あるなり。

九藏、公務の餘暇、常に家にあることなく、星を戴いて出で、星を戴いて入る。近隣の者と雖、其の何事を爲すかを知る者なかりき。後九藏、壽を以て終るに及んで、城下近傍の山谷に、松、杉、檜等の樹木の、鬱葱として繁茂するを發見せり。是九藏が公務の暇を以て、多年の間に、私に手栽せしに外ならずといふ。藩儒爲に碑そまを建てて、其の功績を録したりしは、余

青々ト相成

が幼時に目撃せし所にて、今猶歴々として記憶に存せり。

人ニ知ラズニモトシテ行イ

十年の利は、樹を栽うるにあり。九藏の陰徳、實に感服の外なし。今の世に當り、能く一舛の餅を喰ひ盡すものは、之を覓むること、甚難きにあらざるべきも、能く此の陰徳を施すものは、果して覓め得べしや否や。九藏は微賤者なり。而して猶且此の美談を遺せり。當時の士大夫たる者にして、能く百年の利を栽ふしもの、果して幾人かありし。近年山林の濫伐と、水害の頻繁ハツクシなるとを聞く毎に、余は未だ曾て

餅九藏を追慕せずんばあらざるなり。世已に九藏の如く、私に公共の利たる栽樹の計を爲す者なし。之に準じて、夫の百年の利たる大道を行はむとする士君子を覓むるも、遂に畫餅たらざるなし。新年到る所に稚松の林立するを見、到る所に雑煮餅の大食を誇るを聞く。知らず、何れの處にか、果して餅九藏の佳話を聞くを得べき。余の新年に際して舊話を説くこと、抑も偶然にあらざるなり。(杉浦重剛)

第十二 雑木林

畫餅  
偶然  
トモタ

東京の西郊、多摩の流に至るまでの間には、幾箇の丘あり、谷あり。幾條の往還は、この谷に下り、この丘に上り、うねくとして行く。谷は田にて、概ね小川の流あり。流には稀に水車あり。丘は拓かれて畑となれるが多きも、そこには、角に劃られたる多くの雑木林を殘せり。余はこの雑木林を愛す。木は檜、櫟、榛、栗、樺など、なほ多かるべし。大木稀にて、多くは切株より簇生せる若木なり。下ばえは大抵奇麗に拂ひてあり。稀に赤松、黒松の、挺然林より秀でて、翠蓋を碧空に翳せるあり。

霜落ちて大根ひく頃は、一林の黄葉錦して、また楓林を羨まず。その葉落ち盡せば、寒林の千萬枝、簇々として寒空を刺すべし。日落ちて煙地に満ち、空薄紫になりたるに、大月盆の如く出でたる、尤も可なり。

春來りて淡褐、淡緑、淡紅、淡紫、嫩黄など、和かなる色の限を盡せる新芽を著くる時は、何ぞ櫻の花にのみ狂せむ。

青葉の頃、その林中に入りて見よ。葉々日を帯びて、緑玉、碧玉、頭上に蓋を綴れば、わが面も青く、もし假

假寐

カマエ  
カマエ  
カマエ  
カマエ  
カマエ

睡せば、夢また緑ならむ。

初茸の時候には、林を縁とる萩穂に出でたる薄女郎花、荳蔻林中に亂れて、自然はこゝに七草の園を作る。月あるも可、月なきもまた可なり。風露の夜、これらの林のほとりを過ぎよ。松蟲、鈴蟲、轡蟲、蟲といふ蟲の音、雨の如く流るゝを聞かむ。おのづから蟲籠とならむも妙ならずや。(徳富健次郎)

第十三 水力の利用

人の生活に便益多からしめんには、勉めて天然力

の利用を圖るを要す。中にも水力の利用は、其の  
 法頗る多様にして、之を運輸交通の便に供するが  
 如きは、いふまでもなく、小は水郷の人家、桔槔の聲  
 に和して、一上一下、日に一二俵の米を搗く所より、  
 大は雷電の如く震動せる、幾十丈の瀑布を引き、  
 巨萬馬力の電氣を發せしむる、大装置に至るまで、  
 効能の著大なること、測るべからざるなり。

東京の北、玉川上水附近の各村邑の如きは、いづれ  
 も灌漑の餘水を引き、水車を設けざる處なき中  
 に、拜島村といふは、幅六尺に満たざる小溝渠の流

通するに過ぎず。水車の直徑も亦八九尺を超えざ  
 るに、或は三間に一を架し、或は十間に二を架して、  
 能く水力を利用したる結果、全村の富裕を致し、關  
 東の金持村と稱へらるゝに至れり。  
 かくの如く、水力利用の效果著大なるは、いづれの  
 國も同様なれども、殊に我が國の如きは、地勢幅狭  
 く、長延びて、巍峨たる山脈、國の中央に連互せるが  
 故に、到る處に瀑布瀨湍の奔激せるものあり。河水  
 の流勢も猛烈なれば、水力を利用して大工業を營  
 むには、最も適當の状態に在りといはざるべから

山、高、  
 ク、リ、セ、エ、テ  
 フ、ル、ト

ず。此の天恵を利用して、剩す所なからしむるは、實に我が國人當然の務にして、今や盛に此の種の事業の勃興するに至れるは、甚喜ぶべき事なりといふべし。(河及湖澤に據る)

第十四 樺太

明治三十七八年戦役の結果、樺太島の南半、即ち北緯五十度以南の地は、我が帝國の領域となれり。樺太は、また薩哈噠とも云へり。今より百二三十年前には、此の地方に關する邦人の知識、甚だ乏しく、



薩哈噠は北海中の一大島なれど、樺太は離島ならずして、東韃靼の地續なりとしたりき。當時、蝦夷地一帯は、松前侯の支配に屬したりしが、其の統治は、決して治く行はれたりとは言ひ難く、北蝦夷殊に樺太地方の如きは、邦人の到る者甚だ稀なりき。然るに、當時、露



か(け)のきい  
壓服

人は既にオコツク、カムチツヤカ等の地方に殖民し、進んで千島列島を南下し、到る處に夷人を壓服して、漁獵の利を占め、更に進んで、松前侯に通商を求めしかば、松前侯も始めて露人南侵の輕視すべからざるを知り、幕府もこの報に驚かされて、北門の鎖鑰の一日も忽にすべからざるを覺るに至りぬ。此の後、松前藩及幕府より、屬吏員を派して、蝦夷地を巡視せしめしが、文化五年に至りて、松田傳十郎、間宮林藏の二人、松前奉行の命によりて、樺太の奥陬を探檢せり。間宮林藏は、この年の秋、再單身進

んで深く樺太の奥地を極めしが、更に海を渡りて東韃の地に入り、マンゴ河を浜つて、當時滿洲官吏が假府を建て居たる德樗まで到れり。林藏がこの空前の探檢を了へて、宗谷に無事歸著せしは、翌年の秋も末つ方なるが、これに由りて、樺太即ち薩哈噠の一離島なる事確められ、その事情も漸く邦人の間に知られて、漁獵に従事する者、亦漸く渡航するに至れり。  
この頃、露人は、一方には千島を南下し、他方には、樺太を南侵し來りて、土人を欺瞞し、邦人と利を争ひ

しかば、この地方に於ける兩國民の葛藤は、常に絶ゆる事なかりき。既にして、露國は切にわが國に迫り、通商條約を結び、千島樺太における兩國の境界を定めむことを求めたりしが、遂に安政元年の下田條約に於いて、日露兩國の界をエトロフ島とウルツプ島との間と定め、樺太島においては、日露兩國間に界を分たず、是れまで仕來りの通に、雜居兩屬たるべしと定めぬ。

然れども、露人の志は、全く南侵の一點に在り。されば、これを見たる我が當路者は、一日も早く境界を

決定せしめむと欲し、種々苦心焦慮したる末、安政六年、露國の東部シベリア總督ムラビヨフの品川に來れるを機とし、樺太境界に關して談判を開きしが、この時我が幕府の委員は、天度凡そ五十度を以て兩國の界線と定めむと提議せしにも係らず、彼は却つて薩哈噠において日本漁業者の居住を許すべきを以て、薩哈噠と蝦夷との間の海を以て、兩國の境界となさざるべからずと主張し、談判遂に調はずして立分るゝ事となれり。

この時に當りて、歐米諸國は、頻に幕府に迫りて、開

港貿易を要求し、幕府は外交の急難に苦められて、  
 一日静慮すべき暇なかりしが、尙北邊境界問題の  
 苟くも看過すべからざるを見て、この度は、更に我  
 より進んで、彼に決定を求むる事とせり。仍りて文  
 久二年、幕府の使節竹内下野守、松平石見守等は、遙  
 に露都ペテルブルグに到りて、イグナチエフ將軍  
 と會し、樺太境界問題の解決を促して、日露の國境  
 は北緯五十度と定むべきよしを主張せり。老猾な  
 る將軍は、初より言を左右に托して聞き入るべく  
 も見えざりしが、遂に我が使節の辯論に服したり

すすすすす  
 ののののの

けむ、とにかくに五十度附近に於いて、境界を劃す  
 る事とし、雙方より委員を派遣して、實地の踏査を  
 なさしめたる上、確定すべしとて、假條約に調印す  
 るまでに至りぬ。然るに、この時我が幕府は、内憂外  
 患の擾々たるに紛れて、遂に國境の踏査決定を果  
 さざりしは、實に千秋の恨事なりと謂ふべし。  
 かくて、此の後慶應三年に、我が幕府の使節が、露都  
 において締結したる條約は、極めて我の不利に歸  
 し、樺太全島を露國の所領とし、露國は唯島上に雜  
 居する日本人の漁業を承認する事となりぬ。此の

如くにして我は遂に當然我が領土たるべき樺太を失ひしなり。されば明治維新の後も、樺太に關する論議は、頗る當局者の間に喧しかりしが、明治八年五月、露都に於いて彼我全權委員の調印せる、樺太千島交換條約によりて、我は樺太全島を悉く露西亞に與へ、露西亞は、千島列島の占守島より、得撫島に至るまでの十八島を、悉く日本に讓る事となりたり。

明治八年より後三十年にして、ポーツマウス條約の締結を見る。われ等の祖先の久しく争ひたりし

北緯五十度以南の樺太は、こゝに確實に帝國の版圖に歸せるなり。

第十五 威海衛の陥落 その一

明治二十八年一月二十五日、我が陸軍は、海軍に護送せられて、榮城灣に上陸し、直に榮城を陥れて、威海衛に進む。三十日威海衛東方の百尺崖砲臺を砲撃す。敵の水師提督丁汝昌は、自ら定遠に乗り、來遠、濟遠を率ゐて海岸に近づき、陸上の兵を助けて、頻りに巨砲を發ち、大に我が軍をなやませり。

緯度

されど我が軍少しも屈せず、奮戦呐喊して百尺崖を陥れ、なほ進んで海軍の諸砲臺を陥る。是に於いて、我が海軍より選抜せる水兵五十餘名、上陸して陸軍に代り、各占領砲臺の守備に任じ、その備砲を用ゐて、海上なる帝國艦隊と相應じ、劉公島に向つて、頻に砲撃を加へたり。此の四面重圍の中にありて、丁汝昌は巧にその艦隊を操縦して、よく掌大の孤島を守り、旬餘日に亘りて屈せず、益勇敢なる抵抗を持續せり。

是に於いて、我が六號水雷艇は、敵が防禦の爲、港口に布設せる防材を破壊すべき命を受けて、二月三日の夜、威海衛の東口に進めり。漸くにして防材に達せる頃、敵の哨艇たる七隻の水雷艇は、直に我が艇の潛行を發見し、四方より之を圍みて、銃砲を雨射し、日島砲臺も亦速射砲を放ちて、之を痛撃せり。我が艇員は少しも騒がず、自若として四邊を凝視し、終に防材の一端に航路を發見し、潛に其の内に入り、三たび擲爆薬を使用して、その一部を破壊し、任務を完了して本隊に歸れり。

伊東司令長官、此の報を得て大に喜び、水雷艇を放

ちて、敵の艦隊を襲撃せしめんと欲し、第一第二第三の各水雷艇隊司令を旗艦松島に召集し、令を下して曰はく、余は、今諸君に、この港内に突入して、敵艦を轟沈すべきことを命ず。抑も水雷艇の港灣に突入するは、各國海軍の未だ嘗て試みざる所、實に難中の難事なり。諸君、願はくは、一命を國家に捧りて、帝國海軍の名を世界に輝されよと。各司令は、快く之を諾し、まづ諸艇長を率ゐて陸に上り、よく敵艦の位置を視察し、艇に歸りて、書信を焼き、衣服を更めて、靜に夜の更くるを待てり。

五日午前三時、月落ち海暗きに乗じ、第二第三の水雷艇十隻は、蕭々として東口に進み、防材を超ゆるに及び、急に全速力を出して、港内に進入せり。これよりさき、汝昌は、防材の破壊せられたるを聞き、必ず我が艦隊の襲來せんことを慮り、諸艦に令して、警戒を嚴にせしめたり。されば我が艦隊の突入すると等しく、港口にありし艦の哨艇は、合圖の火箭を打ち上げ、諸艦皆水雷艇防禦の用意をなせり。

## 第十六 威海衛の陥落 その二

是の夜、旗艦定遠にては、汝昌、一歐人と共に艦橋に出で、暗中を透して四方を望み、警戒を怠らざりしが、忽ち左舷の正横、約半海里を隔てたる水面に、一點の黒體現れたり。汝昌驚きて諦視する際、一哨兵「水雷艇來襲せり」と疾呼せり。砲員は、直に砲列につき、榴霰彈を放ち、又機砲を發きて亂射せり。この間をくぐりぬけて、なほも銳進し來るものは、疑もなき水雷艇にして、一隻は艦首の方より、一隻は艦尾の左右より、まつしぐらに突進し來りて、早くも數百米突の近距離に迫れり。

此の時、定遠の放てる一彈は、我が九號艇に命中し、一團の汽煙闇を破りて上騰せり。是より數秒時を出でざるに、轟然たる響と共に、定遠の艦體、劇しく震動し、瀑布を倒し懸けたる如き水柱は、空中に迸りて艦上を浸せり。これ正しく、我が一發の魚形水雷の、その艦底に命中して、爆發したるものにして、渦卷く潮水は防水艙口より走り出で、一分時ならずして、下甲板の浸水一尺におよび、艦體少しく傾斜せり。汝昌急に錨を揚げしめ、日島の南側に移りて、港口を防禦せんとすれども、潮水は一秒一秒に

浸入し來りて、如何ともすること能はず。よりて止むを得ず、淺處に乗り上げ、乗員をして悉く上陸せしめたり。此の日我が水雷艇の損害も亦頗る多く、十隻の中、無事なるは僅に四隻に過ぎず。かくて翌夜ふた、び第一艇隊の五隻、東口より闖入せんとしたれども、敵の警戒益嚴なるべきを察し、先づ第二第三艇隊をして、ことさらに西口より突入する状を示して、敵の哨艇を迷はしぬ。六日午前四時、月の落つるを待ちて、防材附近に達せり。敵は、昨夜の攻撃に懲り、斷えず電氣燈を旋回して海

面を照し、時々發砲して警戒せり。我が艇隊は、一時悉く防材に乗り揚げたりしが、漸く港内に入り、奮戦して、皆水雷を發射し、終に來遠威遠寶筏の三隻を撃沈し、各艇一兵をも損ぜずして、本隊に歸著せり。

我が水雷艇の突入大効を奏し、敵の勢頓に挫けたるを以て、伊東司令長官は、此の機に乗じ、總艦隊を舉げて、敵軍を攻撃せんと欲し、二月七日の早朝、艦隊を二分し、本隊第一遊撃隊の八隻は、劉公島の東北より、其の東端砲臺に向ひ、第二遊撃隊、及第三遊



撃隊の十四隻は、東口の東方より日島砲臺に向ひ、共に單縦陣を布きて進航せり。既にして戦鬪の號音起り、各艦の大橋頭には、開戦を示せる大軍艦旗、勇しく風に翻りて、兵員皆その部署に就き、肅然として言語を交へず。唯波を蹴る轉輪の濁音を傳ふるあるのみ。

既にして、劉公島に向へる我が本隊の、六千米突の距離に接近するや、敵の砲臺まづ發砲せり。我も之に應じ、巨艦八隻の備砲、皆斜に天を指し、通常榴弾および榴霰彈を相混じて猛撃したれば、砲臺は忽

ち黄烟に包まれ、著彈處々に爆發し、閃光四邊を射る。日島に向へる一隊も、相前後して戦を開き、陸上の我が軍も、百尺崖附近の諸占領砲臺より、日島を砲撃すれば、鎮遠以下の敵艦も、發砲して之に應じ、殷々轟々として怒雷の如く、海陸一面、硝煙の中に沒了し、日光も之が爲に朦朧たりしが、忽ち日島の火藥庫、我が砲撃を被りて爆發し、その砲臺は、終に復用うることに能はざるに至れり。

此の時敵の水雷艇十餘隻、港を出でて遁走せしが、急に我が軍に追はれて、皆自ら淺瀬に乗り上げ、悉

く我が手中に入れり。是に至りて、敵は一隻の水雷艇をも有せず。

第十七 威海衛の陥落 その三

九日、我が占領砲臺の一なる、鹿角嘴砲臺より放てる弾丸、敵艦靖遠を貫きて、之を沈没せしめたり。敵兵も、自ら彼の半沈没せる定遠を破壊し、將士復戦ふ心なし。

汝昌憂慮に堪へず。兵士を集めて諭して曰はく、將となり、卒となるも國に盡す忠は一なり。敵彈豈人

を選びて殺すものならんや。死生皆天に在り。願はくは、諸子、君恩を忘れず、力戦せよ。援軍必ず來らんと。爾來汝昌、戦ふ毎に自ら彈雨の中に出でて、諸軍を指揮したりといふ。

此の時、劉公島砲臺にある敵の陸兵は、曩に水雷艇の逃走するを目撃し、他の軍艦も亦之に倣ひ、陸兵のみを遺棄せんかと疑ひ、軍艦一二隻を奪ひて、逃走せんと企て、水兵も亦既に士官の命を拒むに至れり。艦隊の諸將校、盡く提督の室に集り、全艦隊の水兵離反して、用うることを能はざるを訴ふ。汝昌慨

然として曰はく、子等の部下、汝昌を殺さんと欲せば、速に殺せ。われ豈生を惜む者ならんや」といふ。一坐皆面を掩ひ、感極つて、慟哭するものあり。汝昌、乃ち一歐人を遣し、兵士等に諭さしめて曰はく、汝等須く最後の快戦を試み、刀折れ弾盡きて後に降るべし。日人、必ずその忠義に感じて、禮を以て汝等を遇すべし。然らば汝等は名譽と生命と、兩つながら全うするを得ん」と。然れども兵士等遂に命を奉ぜず。次いで、汝昌が最も頼みとせる劉公島東端の巨砲も、十一日の戦にまた我が砲彈に破壊

せられたれば、汝昌もここに百計盡きて、我が軍門に降らざるべからざるに至れり。十二日、午前八時三十分、清國砲艦鎮北は、白旗を前檣に揚げ、港口を出でて、我が本隊に近づき、軍使程璧光、我が旗艦松島に至りて、丁提督の書を伊東司令長官に呈せり。その書の大意に、汝昌はじめ、艦破れ人盡くるまで、決戦せんと思ひしかど、千百の生靈を奪ふに忍びず。殘艦及砲臺は、貴軍に獻すべければ、兵士及人民を許して、各故郷に歸らしめ、以て其の生を完うせしめら

れんことを乞ふ。

といへり。司令長官快くその降を容れ、更に酒果を軍使に託し、之を丁提督に贈りて、苦戦の勞を慰めたり。十三日、程璧光喪服を著して再來り、我が司令長官に謁し、悄然として語りて曰はく、提督は閣下の情誼に感泣し、事已に足れりとし、總兵劉步蟾、統領張文宣と共に、藥を仰ぎて節に殉せりといふ。我が將士、之を聞きて、皆その義烈に感じき。伊東司令長官は、特に命じて、儀式の外は奏樂を禁じて、弔意を表せしめ、又運送船康濟號を與へて、提督の柩を

芝罘に送るに供せしめたり。

十七日、我が總艦隊は、悉く威海衛港内に入り、收容軍艦を合せて、四十餘隻の軍艦、悉く旭旗を翻し、旗艦松島に起れる、劉曉リウキョウたる君が代ミコトの奏樂に和して、各艦の兵員萬歳を呼ぶこと三回、山雲爲に裂け、海波爲に湧かむとせり。(小笠原長生)

第十八 廣瀬中佐の最期

時は三月二十七日の午前三時を過ぎたること三十分、十一日の月既に沈み果て、闇々たる海上を、

かなたこなたにさし向くる探海燈の光もの凄く、砲臺の中にも哨艦の上にも、警戒怠なき旅順港口に近く、波を切る音だに憚りつゝ、肅々として進み來れるは、有馬中佐司令の下に、音に聞えたる廣瀬中佐を始めとして六十七人の勇士、十數隻の驅逐艦、水雷艇に護衛せられ、四隻の汽船を走らせて、今しも第二回の港口閉塞を行はんとするなり。艦船の操縦は巧なれども、斷間なき探照を漏れおほすべくもあらず、港口より二海里の所に至りたる頃、忽ち敵に發見せられ、黃金山及老虎尾の兩砲

臺、并に哨艦たる若干の砲艦驅逐艦より、大小の砲彈を雨霰と注がれぬ。

固より期したる事なれば、我が軍如何でかためらふべき、目も向けあへぬ白熱燭光の下に暴露し、機關砲を發射しつゝ、一途に目的の方向に進み、敵の驅逐艦の之を遮らんとするをば、我が水雷艇立ちどころに擊退し、全速力を以て四隻悉く水道に入り、先登の千代丸は黃金山の西側海岸より約半鏈の所に自沈し、第二の福井丸は千代丸の左側を過ぎ、少しく前方に進みて投錨せんとする際、敵の驅

逐艦より魚形水雷を受けて、その位置に爆沈し、第三の彌彦丸は福井丸の左側に、最後の米山丸は千代丸と福井丸との間を通過し、水道の中央に投錨したる時、敵の魚形水雷を受けて爆破し、惰力によりて左岸に近く横さまに沈没したり。各船の勇士は、その船の沈むを見て端艇に乗り移り、數海里的波浪を凌ぎ、各々收容水雷艇に漕ぎつくる間、疲勞を勵さんとして、一齊に軍歌を高唱し、海軍萬歳を叫びつゝ、退却するを、敵は飽くまで惱さんと、其の聲をあてに亂射せり。

かくて全世界の賞讃を集めたる快絶なる事業は終りしが、こゝに壯烈を極めたるは、廣瀬中佐の最後なり。中佐は福井丸の指揮を執り、千代丸に續いて港口に入り、選びたる位置に達したりしかば、杉野兵曹長に爆發薬に點火すべきを命じ、兵曹長は命に應じて船艙に下りたる刹那、敵の魚形水雷命中して、火薬は點火を待たずして爆發し、兵曹長は悲惨なる戦死を遂げしを、中佐は斯くとは知らず、船は目的の如く爆發し、乗員を端艇に移したれど、獨り兵曹長の姿の見えざるにぞ、一旦乗り移りた

る端艇より再び福井丸に引返し、せめて死骸なりとも捜し出さんと、歸りては又乗り移り、かくすること三度に及べど、遂に見當らず。波濤既に上甲板を浸し、船體の四周は、水將に渦を卷かんとして、沈没瞬間に迫りたれば、無限の憾を遺して、福井丸を離れ、怒濤に掀翻せらるゝ、端艇の舷上に立ちて、血涙を揮ひて別を惜み居たるをりから、空を掠むる飛彈の音と共に、血潮の煙、浪のしぶきと共に乗員の面を濡すよと思ふ間もあらず、中佐の影は水泡の底に消え、唯一片の肉と、微塵に碎りたる頭蓋よ

り<sup>トヒヤ</sup>入り<sup>ノヒヤ</sup>進り出でたる腦漿の、一同の衣を染めたるのが、永久の記念とぞ残りたる。

數日經たる後、中佐の遺骸は岸邊に打揚げられたれば、敵將アレキシーフは、懇に之を葬りたりといふ。敵ながらも、其の壯烈の死を悼みけん。軍神廣瀬中佐の名は、世界の隅々まで響き渡りて、何時の世までも朽ちざるべし。

第十九 わが海軍

一

朝日に輝く日の丸の旗

閃く皇國の軍艦どもよ

千島の果より沖繩までも

開闢このかた異國の敵に

一度も今まで穢されざりし

貴き海岸守れや守れ

敵の軍艦幾百あるも

千尋の底へと沈めてしまへ

二

世界に又なきこの島國に

天の恵で生れしものは

幼き時より海には慣れて

暴風も恐れず波にも怖ぢず

我をば攻めむとする者あらば

武勇を比べむ怒濤の中に

敵の軍艦幾百あるも

千尋の底へと沈めて見せむ

三

風吹き浪立つ嵐の時も

妻子の爲には沖へと出でて



命を惜まぬ日本男兒

何ぞや恐れむ敵の軍艦

浪をば枕に死ぬるも覺悟

君あり國あり又墳墓あり

敵の軍艦幾百あるも

千尋の底へと沈めて見せむ

四

弱き船にて大海渡り

異國の海岸荒してまはり

鬼神なりと呼ばれしものは

大膽不敵のわれらの祖先

彼より受けたる武勇をもつて

あつばれ守れやわが神國を

敵の軍艦幾百あるも

千尋の底へと沈めて見せむ

五

水雷大砲甲鐵艦を

自由に扱ふ非凡の手練

皇國に仇なす敵のあらば

萬里隔つる國なりとても

一々汝の力で懲し

國旗の威嚴を天下に示せ

敵の軍艦幾百あるも

千尋の底へと沈めてしまへ (外山正一)

第二十 世界の周航

世界の周航は、今日にありては、さまで困難なる事にはあらざれども、<sup>三百年</sup>の昔にありては、至極の難事にして、颶風、疫癘、飢渴の危難の如きは云ふまでもなく、海岸線の定かならざる事、<sup>チヤケカシロイ</sup>残忍の野蠻人



に出で遇ふ事、其の他種々の危険多かりしは、數へ盡すべくもあらず。抑も始めて世界の周航をなしたるは、葡萄牙の航海者マゼランにして、西暦一千四百七十年に生れたる人なり。

マゼランは、一千五百十九年の九月二十日に出帆し、針路を西に取りて、一の海峡を發見せり。此の海峡は今尙その名を以て稱せり。マゼランは、其の後フィリッピンの一島に於いて、土人の毒手に斃れしが、その船隊は、同二十二年の九月六日に

本國に歸れり。此の船隊は、僅に五艘にして、然も今日にては、長途の航海に充つべしとは思はれず、その中最も大なるも百三十噸、小なるものは、僅に六十噸の荷を積むに過ぎざる小船なりき。

其の後五十年にして、英吉利にサーフランシスドレークといふ大膽なる人出でて、亦世界の周航をなししが、その時は、十五噸積より百噸積に至る小船を整へて、船隊をつくりきといふ。今日太西洋を航海する船は、三千噸乃至六千噸積ならざるはなし。當時の情況思ふべきなり。

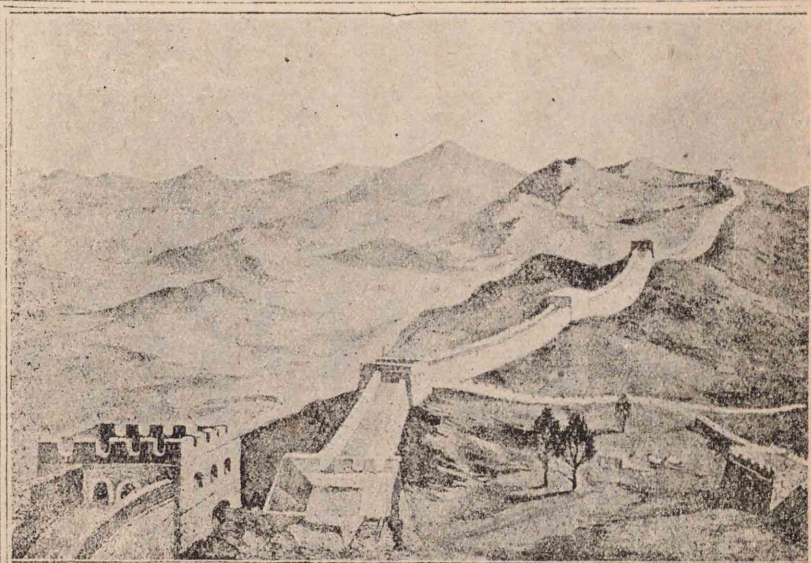
マゼランと云ひ、ドレークと云ひ、各其の航海に三年の長き歳月を費し、またカピテンジェームスクックは、四年の星霜を経たりしを、今は頗る容易にして、船は蒸氣の力もて馳せ、又其の船中には、鬱を散じ悶を遣るべき物さへ備りて、彼のマゼランが三年の長きにひき換へ、僅に三個月の間にして、世界の周航をなし得べしといふ。文明の力亦偉大ならずや。(明治時代文範)

第二十一 萬里の長城

萬里の長城は、支那帝國の北部にあり。韃靼人種の侵入を防がむがために、築造せるものなるが、今は世界の一奇觀として、三尺の幼童も、殆どその名を知らざるはなし。

此の城、東は黃海の濱より起りて、西は嘉谷關に至りて盡く。其の間、或は高峻なる山岳を踰え、或は曠漠たる原野を横斷す。黃海の濱より、山西省の堺に至るまで、大約二百三十餘里の間は、截石又は瓦磚をもつて築造し、二百歩毎に、方形の櫓樓を設け、要路にはまた堡砦を備ふ。城壁は二重に築造せる所

少からず。稀に三重なるもあり。但し山西省以西は、ただ土壘もしくは堆石のみにして、處によりては、此の類のものだに絶えてあらざる處多し。長城の最要なる部分は、厚さおのく、一尺五寸ばかりなる、二箇の壁より成り、其の距離數十尺あり。内部は土にて充填す。壁の高さ平均二十尺、處々に階段もしくは平坦なる坂路を設けて、頂上に達せしむ。頂上は扁平にして、方形の瓦磚にて蔽ひ、六人の騎兵轡を並べて、自在に馳騁することを得。櫓樓の高さは、大方四十尺あり。長城の内外における土



地の状態は、いちじるしく相異なり。城内には住民群をなして、農耕を力むれども、城外には人跡稀にして、野獸跳梁せり。  
 長城の築造は、今より二千百餘年前、秦の始皇帝の計畫に係り、五年の歳月を経て、はじめて成功せるものなり。當時築造の際、使役せ

る工夫の数は、無慮數百萬人にのぼり、殆ど全領土を通じて、十人毎に一人を徵發せる割合なりといふ。

或る英國人は、此の長城の大きさを想像せしめむがために、奇異なる計算を行へり。其の所説によれば、長城の長大なる、その櫓樓を除くとも、なほ大不列顛國の全家屋を建設し得べきほどの、莫大なる瓦石を用ゐてすら、これを營造するを得ず。又その櫓樓に用ゐたる瓦石のみにても、倫敦全市の家屋を築造するに足り、若し又長城の全部を、高さ六尺厚

さ二尺のものに改造せむには、地球を二度圍繞すとも優に餘あるべしといふ。(永井一孝)

第二十二 伯林

伯林市の本町通ともいふべきは、ウンテルデンリ  
ンデンといふ、菩提樹の並木四列を以て、五條に分  
ちたる砥の如き坦道なり。其の一端なるチエルガ  
ルテン公園の入口に大門あり。ブランデンブルヒ  
門と稱す。即ち一千七百九十年佛國に勝ちたる紀  
念の凱旋門にして、其の上に、戰勝神が四馬を御す

卓立

る銅像を安んず。像は曾て奈翁一世攻入の時に掠  
奪せられしを、千八百七十一年の大勝に取り還し  
たる者なり。初は佛國の方に面せしめて、其の勝利  
を誇りしも、後には反對の方に向け換へたり。蓋し  
此の戰の後、獨逸が佛國の感情を和げむ事を勉め  
て、交際上に方便を盡ししことは、人の能く知る所  
なるが、此の銅像の位置を變換せしも、亦其の一例  
なるべし。

この門を入れれば、一方には、佛國より掠奪したる大  
砲を以て築きたる、戰勝碑の卓立するあり。他方に

櫛比 殷賑

は、佛國より取りし償金の一部分を以て建築したる、帝國議會事堂の聳立するあり。共に其の結構の壯大なるに一驚を喫せり。  
ウンテルデンリンデン街の兩側には、旅舎麥酒店、珈琲店賣品店等櫛比して、頗る殷賑なり。稍下に至れば、數棟の王宮及博物館美術館、大學校演劇館等の大建築物あり。就中先帝の宮城たりし一巨館は、佛國戰利品及同戰役に關係せる諸品の陳列場に充てられ、之を巡覽する時は、普國の佛國を征するに先だちて、其の如何に辛苦經營せしか、又其の戰

勝後に於いて、如何に歡喜拊舞せしかを追想するに足るべし。

又其の陳列品中に、佛國諸都邑の摸都あり。是即ち巴里に攻め上るべき途上に立てる、各都市の形勢を研究せんが爲に、箱庭の如き摸形を製して、用兵の術を講ぜしものなりといふ。其の對側の宮城には、獨逸皇帝玉座の間を始め、壯麗宏美の堂室を有する事多く、又近頃に至りて、帝國議會議員を招集する大廣間を増築せり。是聯邦の盟主となれる故なりとぞ。

伯林の繁盛は、戦勝後の事にして、十九世紀の初には、人口僅に十萬を有し、七十年には、五十萬に足らざりしに、僅々二十五六年の間に、人口の繁殖、市街の改良に、非常の進歩を爲し、人口百七十萬以上に昇り、歐洲第三位の大都府となり、殊に金融の點に於いては、パリを凌駕せんとする勢あり。

然れども、獨逸は佛國の如く、一首府に全力を吸収する傾向なくして、頗る地方分權の實を顯し、フランクフォルト、ミュンヘン、ロンドン、ドレスデン、ハンブルヒ、ストラスブルヒは勿論、其の他の諸市も、近

年驚くべき富力の増進を爲し、大厦高樓續々顯れ來るといふ。(鎌田榮吉)

第二十三 獨逸留學中の所感

普國は嘗て、ナポレオン一世の大打撃を被り、國內おほかた佛軍の馬蹄に蹂躪せられしかども、後には、一舉して佛國に克ち、ゲルマン聯邦の盟主となりて、威武を歐洲に輝せるのみならず、商工業等の上にて、英國を凌がむばかりに發達したるは、洵に偶然のことにあらず、余は其の國の首府伯林に



往きて、始めて其の理由あるに感じたり。

歐洲國民が、生活の度の高きことは、かねて聞きしところなるが、英佛等の國々に至り、目のあたりその實況を見て、遙に想像にも優れるに驚き、更にゼルマンに往きては、全く想像に反して、その極めて質素なるに驚きたり。

ウイールヘルム老帝が、勤儉尙武の遺訓を垂れられたることは、史上に於いてほぼ知れる所なるが、其の風のかくまでに冷たく行はれたらむとは、更に思はざりしなり。獨逸人は、此の風に安んずるのみな

安んずるのみならず、

紳士  
身命、貴人

言子之深切  
十九  
質朴  
又ナク

らず、これを以て大に誇るべき事とせり。されば身分ある紳士すら、家にありては、裝飾もなき素朴なる卓上に、冷なる肉と一瓶の麥酒とを並べて、之を嘉肴とも美酒ともして満足するなり。某の博士など呼ばるゝ、知名の人を訪ぬるに、書籍紙片など、あたり狭きまで列ねたる書齋に延き入れ、諄々として學事を談ずるさまの、いかにも質朴にして、その生活の儉素なるは、我が國人の思ひ到らざる所なり。倫敦巴里を見たる目にて伯林を見れば、實に僻陬の都會にすら及ばざる心地す。

僻陬の都會

余は一日、伯林より程遠き地方に旅行して、ある家に宿れり。主人はさばかり教育ある人とも見えざりしが、余に醃藏コンヤケの肉と麥酒とを供し、さて「遠來の珍客を饗應すべき物とてはあらず。われ等は、わが國の軍備モトメと教育とを完備せむがため、多額の租税を上納するを以て、平常節儉せざるべからず。こはひとり我等のみにあらず、國民皆然るを以て、君もこれを諒せよ。されど其の代に、我が國の教育と軍備とを熟覽して、家づともし給へ」といへり。國民一般に、此の思想を以て、國家に對したれば、僅々な

る歲月の間に、現今の如き強國ともなりたり。獨逸人は、かく質素なるのみならず、また最も勤勉なる國民なり。いづれの國にても、我が日本の事は知るもの少くて、我が國語を用うるものに至りては、絶無アセタラともいふべき程なるを、彼等は東洋に商權を張る必要アトクハクニテなどのありてにや、學生の間には、我が國語を用ゐて談話する團體さへ設けられたり。これにても、其の用意と勤勉とを知るべし。古人が勤儉を以て興國の本とせし理は、われ獨逸の地を踏みて、始めてその信なるを知れり。老帝の

遺訓が、かばかり國民の腦裏に徹底して、なほ今日  
 實行せらるゝは、畢竟その大蹉跌をなししにもよ  
 るべけれど、また國人の氣質にもよることなり。此  
 の氣風こそ、實に今より興起すべき、我が國民の摸  
 範とすべきにあらずや。(日高眞實)

第二十四 我が郷國

「江山洵美、是吾郷」とは、大槻磐溪の詩の句なり。人誰  
 か我が郷の美をいはざるものあらむ。青が島は、渺  
 々たる南洋の一小噴火島なり。其の爆然破裂する

畜  
 キウ  
 ケウ

や、火光煽々、天日を焼き、石を降し、灰を散じ、島中の  
 人畜殆ど斃れ盡き、僅に十數人の船に乗りて、八丈  
 島に逃れたるあるのみ。而も此の十數人は、竟に其  
 の故郷を忘れず、火の熄むを待つこと十三年、乃ち  
 八丈を出で、欣然として其の多災なる故郷に歸り  
 たりき。

占守は、窮北不毛の絶島、層氷累雪の處なり。當路の  
 有司、土人の便を計り、これを南方色丹島に徙す。色  
 丹の地は、棋楠樹茂生し、落葉松濃に、黒狐三毛狐其  
 の蔭に躍り、流水涓々として、處々に走り、玉蜀黍稜

べく、馬鈴薯植うべく、殊に田園を開拓するものには、賞與の典さへ設けらる。而も遷徙の土人、この新樂土を喜ばず、なほ荒涼たるその故島を慕ひて止まざりき。

又シカゴの博覽會に於いて、その金碧燦爛たる會場の中に、エスキモー土人の村落を構へ、多くの土人を此の所に置けり。而も彼等は、これを欲せず、其の氷山雪塊の本國に逃れ去らむとしき。脆きは人の情なり。誰か吾が郷の美をいはざらむ。これ人間自然の情なり。

金色碧色  
アリテまきう光

然れども、日本人が日本江山の美をいふは、嘗にその吾が郷に在るが爲のみならむや。比較上、實に日本江山の美なるものあればなり。されば外邦の客も、みな日本を以て、現世界における樂土となし、低徊措くこと能はずといふ。是に至りて、頼山陽が花より明くる三芳野の春の曙見わたさばもろこし人もこま人も大和心になりぬべしの詠も、その誣言に非ざるを知る。思ふに造化は、悉くその天工の極を日本國に集め、以てかゝる絶特なる風景を造れるものか。

われ等この土に生れ、朝夕この絶景に對するを得、又上には仁慈なる一系の皇室を戴き、下には忠良なる臣民ありて、此の國體の美を併せて、世界に誇るを得るは、實に無上の天幸に非ずや。されば今の青年諸子は、益奮發して、業を勵み行を磨き、以てこの國土と國體とを、辱めざらむことを務むべきなり。(志賀重昂)

第二十五 三保の松原

三保の松原は、吾妻路に名だたる勝地にして、古人

の秀詠もおほし。久能宇度濱より東につらなりたる出島なり。その間一里餘にして、洲濱の長さあり、短きあり、狭きあり、また數百千の松の緑こまやかにして、枝葉の汐風に吹きたわめられて、高くなり、低くなり、直くなり、曲りたるなど、その景色の美しさ、筆も及びがたし。

遙に東北の方を見わたせば、名に負ふ富士の高峯、愛鷹の翠巒見え、前には浮島が原、吉原、蒲原の驛、薩埵山アライ山と津川の流、清見が關見ゆ。清見寺の鐘の聲は、悠揚として月に澄み霜に冴え、田子の浦回を漕ぐ

舟は、松の梢をばしるかと思はる。北には清水の港  
 賑しくて、入船あり出船あり、漁夫の家軒をならべ  
 て、魚賣る聲かまびすし。南は滄海洋々として、大鵬  
 三千里の羽をうつ倂あり。磯邊には青藻刈る童あ  
 り、海底には鮑とる海人あり。藻塩焼く辛き世のい  
 となみ、いづれか憐ならざるべき。

洲濱の中に字あり。渡瀬の濱八頭の洲崎、戌亥尻、宇  
 津久呂、貝島など呼ぶ。三保神社はその中央に立ち  
 たまへり。社頭は神さびて、鳧鐘の銘は羅山子の書  
 きしとかや。羽衣の松磯田の社あり。物しづかなる

丁又郡ノ如  
 ク見ルガ  
 鳥丸  
 籠

海邊なり。神社の什寶に、天羽衣とて、羅の長絹とい  
 ふものあり。天人の遺したるなりといふめれど、漁  
 夫は天人にかへして、その代に霓裳羽衣の曲を舞  
 はせて、七寶充滿の寶を降したりといへば、此處に  
 あるべきにもあらず。

この松原に、紀の岩代の結松にならひて、枝をたわ  
 めて結びたるが多かるは、いかなる人のいかなる  
 祈願にかあらん、おぼつかなし。また此の松原には、  
 茅萱生ひ茂りて、松露おほく、肉菘容もありとかや。  
 昔はこの松原に野馬ありきとて、今も其の例をの

こして、正五九月の十五日には、近郷より馬を多くひきもて来て、神前につなぐ。すべて此處は、有名な勝地にして、繪師なども、富士を畫けば、また必ず此處を畫くならひなり。(東海道名所圖會)

第二十六 喻言五則

夕生、まき、か、け

鹿の兒、母に隨ひて遊びてありしが、弓を持ち矢を負へるものに遭へり。母遽しくかの肩なるもの飛び來りて、身にあたる時は、必ず死せむ。速に避けよといふに、鹿の兒、落ちつきたる體にて、首をふり、お

のれば、その飛び來る狀の如何なるかを見むと思ふ。とて、母の去るにも去らず、遂に矢にあたりて死せり。世には、頑として教に従ふことを知らず、往々かくの如きものあり。

小猴、人の髭を剃るを見て、その剃刀を偷み、これをまねて、自ら其の鼻を傷ついたり。世の習はずして事に従ふもの、多くは此の類なり。

貧しき兒、菌を探りて歸り、母に誇りて曰はく、母上の探るは、常に醜し。おのれば、蓋は眞珠の如く、欄は燕脂イロシユの如くなるを獲たりといふ。母これを見て曰

はく、これは毒ありて、食ふに堪へざるものなり。總じて、外美なるものは、其の中多く毒を含むものなること、獨この菌のみにあらずと、深く誡めたり。栗鼠、樹に上り、胡桃をとり、その皮を噛み破り、その苦きに顔しかめしが、やがて核に及びて、ほろろみつゝ、まづ苦きを喫せずば、いかでこの滋味を味ひ得べき」といへり。

ある農夫、兒を伴ひ、畑なる麥のみのりを檢せり。兒麥の穂の立てると、垂れたるを見て、いづれかよきと問ふ。父、兩方の穂をぬきて示しつゝ、諭して曰

はく、内充實すれば、必ず下る。かの昂然として、屈することを知らざる者の如きは、皆その未熟なるによりてなり」と。(那珂通高の文に據る)

第二十七 沈勇

オナフーテウヨイ

伊賀越の敵打で有名な荒木又右衛門は、大和の郡山藩の劔術の師範であつた。十三四の時に、同じ年頃の友達と二人で、山へは「ご」をかけに行き、思はず深入をして暮方になつた。それから山を出ようとする時に、又右衛門は、此の邊は物騒な所だから、別



の道を歸らうといふと、連の子はなかくの元氣者で、さういふ所こそ面白いといつて、先に立って行つてしまふ。又右衛門も後からついて行く。是から郡山の城下まで三里程の所、人家は一軒もなく、もう日が暮れて、往來も絶えてをる。ほの暗い月影に、岩窟が谷蔭に見えたが、その中に人の躰が高々と聞える。連の子は、面白い。かねて此の邊に山賊が居て、悪い事をする、と聞いてゐる。ひとついちめてやらうといつて、その岩穴の上から、いきなり小便をしかけた。盜賊は驚いて起き上つて見ると、

小供が二人立ってゐる。益驚いて、何といふ大膽だらう。自分は年來人の物を剝ぎ取つてゐるが、お前たちの様に魂のすわつたものを見た事がない。是から先、路もまだ遠いから、送つてやらうといつて、二人の後について來た。

小便しかけた子は、山姥の謠をうたひながら、歩いてゐる。だが、二口三口で文句に詰り、聲もふるへてゐる。すると山賊は大笑をして、分つた。化の皮が顯れた。その様な大膽は大うそ物。附元氣といふものだ。自分が跡をつけて來たのは、こちらの連の子の、心

のすわってゐるのを見ようと思つてだ。や、天晴な落つきだといつて、又右衛門を大層ほめたて歸つた。此の山賊は、由井正雪の陰謀にくみした、加藤市郎右衛門といふ者であつたといふことである。

第二十八 小僧三が條

或る山寺にて、近き邊の村人の子を頼まれ、小僧として召しつかへり。一日小僧寺を遁れ出で、父母の許に来ていふやう、兼ねて教へられし如く、出家の素意遂げむと思へるに、あまりに師の辛き目見せ

らるゝに堪へられずしてかへり來れりといふ。父母そは何事と問へば、小僧外の事はさて置き、さしあたりて堪へ難きこと三が條あり。第一は、師の坊髪を剃りならへといひて、剃らしめらる。元より手馴れぬことなれば、剃刀の先いさゝかにても頭にさばりて、血など出づれば、手荒き剃様なりとて、事<sup>ト</sup>事しく叱り立てられ、第二には、味噌すれといはれてするに、すり様惡しとて、朝夕うちたゝかれ、第三には、廁に行けば、何しに行くとして呵責せらる。日毎にかくの如くなれば、いかで一生堪へらるべき。身

命もつづき難しとて、泣かぬばかりにいひたつれば、父母大に怒り、さるにても、法師に似合はぬ情なきしかたよといひて、父はかの山寺に行き、かねて頼み参らせし小僧の事、しかじかの由なれば、今はアノコトヲせむかたなし。我が方に引きとりて、百姓に致すべし。暇給はれと、いきまきていふ。

師の坊聞きて、出家といふものは、さらでだに難行苦行を重ねざれば、得道はならぬものなり。わ庄わ庄が如く、小僧のいふ事ばかりを信と思ひ、呼び返さむなどいはる、様の、淺き心にては、小僧も出家はな

るまじ。寺にありても詮なし。返し申さむ。されど、外々の檀家の聞く所もあれば、一とほりは小僧が詞の違を申し知らせむ。抑も味噌のすりやう悪しと申すは、味噌はすりこぎにてするは言ふまでもなきを、彼は塗れる杓子の裏もてつぶしくすれば、さはすまじきにと、度々教へ聞かすれど、とかく用ゐず。これ見給へ」とて、臺所より、折れ損ぜし杓子二三本とり出でて見す。

又廁に行くをとどめたりといふは、わぬしも知らる、如く、毎年代官巡視の折は、いつも當寺に宿ら

るゝにより、其の爲に客殿の邊に新に厠を作り、愚僧はじめこれに入る事はせざるに、小僧一人我が物として朝夕通へば、さはすなといへど、聞き入れず。又髪を剃るは、僧家の戒業と同様にて、せでは叶はざる事ゆゑ、かれて剃りならはしむるに、近頃はおのが頭をも剃り得るほどに手馴れたり。然るに、此の程愚僧が頭をそらしむれば、わざと怠りて、かくの如くになしたりとて、頭巾脱いで見すれば、頭の内あまた切りつけ、血留など幾所にもつけたり。この始末を聞きて、かの父はじめて驚き、我が子の

愛に引かれて、師の坊が懇切をおろそかに思ひしこと、返す返すも耻しき次第なりとて、さまざま詫言して歸りきとぞ。

第二十九 奇遇 その一

東京淺草森下といふ處に、よろづ古き什器を商ふもの多き町あり。こゝに秦野庄吉といふもの住めり。紙屑を買ひとり、之を問屋に賣りて、世を渡る貧しきものなり。されど、その性正直にして、詐り飾らず。同じ商人等は、秤目を偷み、或はよき衣、よき什器

を言ひくたして、價安く買ひとるなど、よからぬふ  
るまひ多けれど、庄吉はさるわざに疎ければ、人  
には愛せられるれども、よき利を得ること少し。

明治十七年十二月二十七日、妻なる者、夫に向ひ、年  
の暮なれば、貧しき身にも、人なみに餅を舂き、己も  
食ひ、隣の家にも贈らむと思ふに、その代はいかに  
といふ。庄吉其の日の資本は、僅に壹圓二十錢ばかり  
りなれども、げふ一日にそれ程の利は得らるべし。  
氣長く待ちてよとて、家を出で、淺草門跡の前より、  
下谷車坂町のあたりを、古もの買はむ。古衣かけむ。

紙屑は候はぬかと、呼びあるきけれど、我賣らむと  
いふ者なし。とかくし行く程に、ある裏屋の戸口よ  
り、賣るものあるにと、聲うちひそめていふ。

入りて見るに、四疊の間に筵二枚を敷きて、主人な  
るべし。年の頃五十餘なる男、古き袷唯一つ著て坐  
するたり。狭き家なれば、残るくま無く見ゆるに、賣  
るべきやうの物なし。いかで我を呼びけむといふ  
かるほどに、主人は佛壇と覺しき所より、ひとつの  
陶製の手爐と、大黒にやいと煤けたる像とを出し、  
「かゝるものは價無きものとは知れど、久しき病に

詞相中

米の代も盡きたりかゝる時の詞がたきにせし妻にも別れたり。きのふは隣の家より恵まれたる餅ありて、カマシ餓をばしのぎしが、げふはそれも無し。これ賣りて、一日の命を繋ぐと思ふに、いかに買ひてはたまはらずや」といふ。

庄吉これを打かへし見れども、よしといふべき所もなし。されど其の饑に臨めるを憐み、十錢に買ひてそこを出で、又よく視るに、二つの品、いづれも缺け損じて、何程の價あるべくもなし。されど大黒は世にいふ福の神なり、見出度後の吉兆ともなるべし。人に

賣らむより、持ちかへりて家のうちにすゑ置かむかとも思ひしが、又よく思へば、かゝる貧しき家にいつかれしものなれば、福の神にはあらずして、貧乏神ともいふべし。持ちかへりたらば、妻につぶやかれむ。捨てむ捨てむと舌打して、路ばたの草の中に、投げ入れしに、石やありけむ、はつしと音してうち破れたり。

碎きすてんとは思はざりしにと、立ち寄りて見るに、かの草むらの中に光るもの見ゆ。怪し、何ならむと、左右の手にて草を披き見れば、黄金あまたうち

散りたるなり。こはいかにと又よくみるに、大黒の腹のうちにあるしが、打破りたる時出でたるなりけり。庄吉ひたと呆れ、何者の入れ置きしならむと、この金の包紙らしきを拾ひとり、朽ちきれたる處をとかくに繼ぎあはせてみるに、上州藤岡不動堂町神崎屋清兵衛と讀まれたり。こゝに庄吉大に驚き、いそぎ我が家に走り歸りぬ。

第三十 奇遇 その二

妻は夫のかへりを待ち侘びたりしが、餅の代はい

かにと問ふ。よき利は無けれども、籠のうちに古き衣と紙屑とあり。それを問屋に持ち行かば、一圓三十錢は得らるべし。我甚疲れたり。おん身持ちてゆきたまへ。歸りに餅米を買ひて來よとて出しやり、黄金を検べ見るに、昔の二分判といふ金にて七十枚、凡そ三十五兩あり。妻に知らせむは善からじと、ひそかに箱のうちに祕し置きたり。

次の日、妻の餅をつかせむとて走りまはるに、庄吉は、年末の禮に、知る人の許に行くと偽り、急ぎ大黒賣りし人の家にゆき、門の名札をみるに、芳野屋喜

兵衛としるせり。思ひしには違へども、尋ねみむとて音なふに、主人は早くもきのふ賣りしものよからぬ故に、返しに来れるならむと、あわて惑ふを、否さまの儀にはあらず。御身は、上野の藤岡なる、神崎屋を知りておはするかと問ふ。主人は驚き、そは我が父なり。世を去りて今は十二年の昔になれりといふ。

「さては兄君にておはしけり。新太郎どのにておはしけるか。七歳の時江戸に預けられし、弟孝次郎に候ふぞや。若き時に身持あしくて、終にかゝる身に

なりたれど、如何にもして父上兄君を見まゐらせたく、年頃尋ねまゐらせたり。父上亡せ給ひて、兄君は故郷を去り給ひし由を聞きしかども、こゝにて逢ひ申さむとは、思ひも寄り候はざりき。きのふ圖らず申し受けし大黒の像に、しかじかの事あり」とて、件の黄金を出して、その無事を喜べば、喜兵衛、且あきれ且喜び、その身の上を語りけるは、十二年の前、父身まかり、心よからぬ手代に、筋無き事を訴へられしが、それより不幸の事打續き、零落して江戸に來り、袋物職何某に入婿せしが、大病に罹りて家



具をば盡く賣りたり。妻は此の身をすてて逃げ失せたり。今は饑渴にせまりたるに、只一つの大黒の像ありしを賣りしにより、斯くは兄弟相見ることを得たり。これ先祖の引き合せ給ふなるべく、また大黒天の神助なるべし。これより兄弟心を合せ、先祖の家の再興を謀らむとて、此の月三十日、弟は兄を家に迎へ、妻に始めて由を告げ、件の金を以て家を購ひ、おのゝ己が得たる商業を營めりとぞ。その後の事はしらず。近き世の事なれば、今なほ在りて、兄弟むつまじきなるべし。(依田百川)

訂正 中等國文讀本卷二 終

本月  
火英  
本三  
時  
日

明明明明明明明明明明  
治治治治治治治治治治  
三三三三三三三三三三  
四四四四四四四四四四  
十十九九八八七七七六六  
年年年年年年年年年年  
二二二二二二二二二二  
月月月月月月月月月月  
十廿廿廿十三廿廿廿廿  
三十八五二八十五五一五  
日日日日日日日日日日  
訂訂訂訂訂訂訂訂訂訂第  
正正正正正正正正正正  
第第第第第第第第第第  
六六五五四四三三二二版  
版版版版版版版版版版  
發發發發發發發發發發  
行行行行行行行行行行



發行所

東京市京橋區南傳馬町  
壹丁目拾貳番地

合資會社 吉川弘文館

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

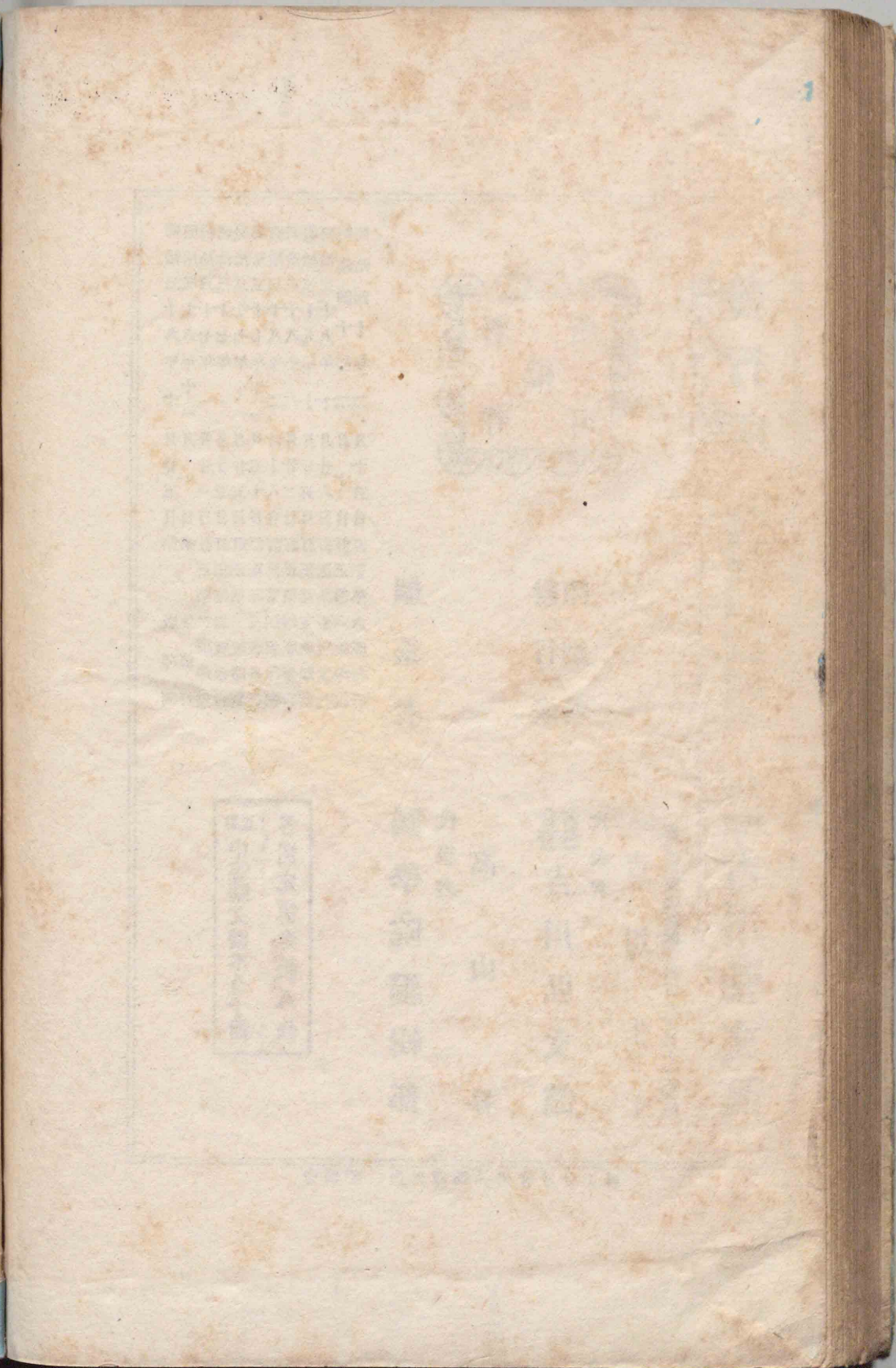
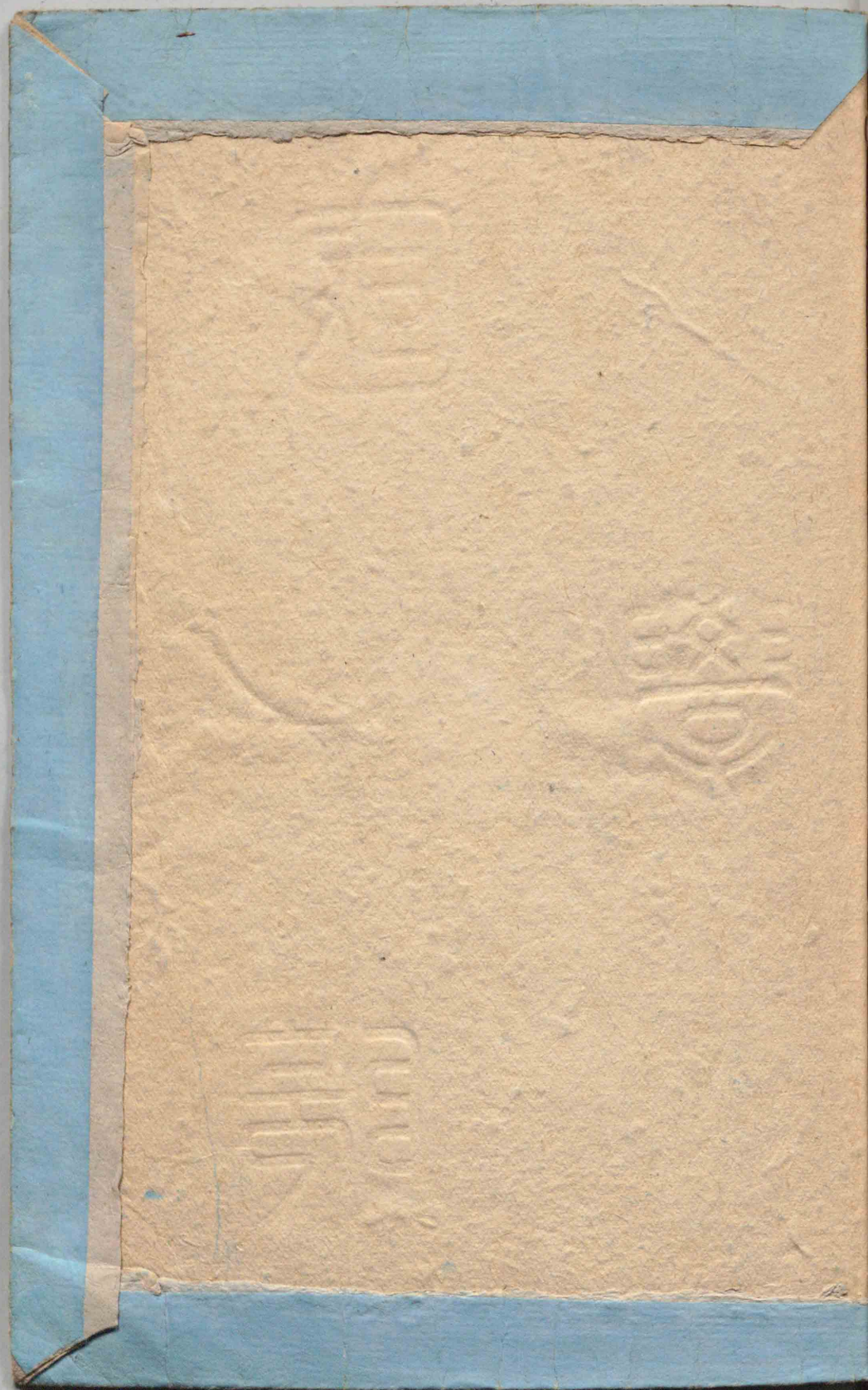
印刷者兼

合資會社 吉川弘文館  
代表者 吉川半七

編纂者

國學院編輯部  
代表者 高山昇

訂正中等國文讀本全十冊  
各冊定價金拾八錢  
改正定價金廿五錢



國

永

井

氏

學

集